

## 唐丹支援者を訪ねてアメリカ、カナダへ行く（2）

群馬エスペラント会 堀泰雄

### 日本人女性のアメリカ体験

そんな私の知的好奇心に応えるかのように、カナダでの最後の夜のカラオケルームで、女性たちがこもごも自分の来し方を話してくれた。

### オクラホマでの体験

てるよさん：私話が下手なんですよ、何話すかなあ。日本語が下手なの。

（じゃあ何語が得意なの？）

（身の上話をすればいいのよ。）

（あの、真ん中に座った話、黒と白の）

じゃあ、その話ね。私がアメリカに来たのは、1500年。。

（え？1500年？あははは！）



あ、1952年。昔の話ね。主人はオクラホマの出身だったのでオクラホマに行ったんです。オクラホマね、昔はカウボーイなんかいたところ。主人はお金持ちというわけではなかったんですけど、19歳で家

を一軒買って持っていたので、私は、人生で借り家に住んだことが無いんです。でも、オクラホマは嫌いだった。それは、人種差別がひどかったからです。白人の場所、黒人の場所とどこでも別れていたんです。レストラン、トイレ、映画館、水飲み場。主人と一緒にいるときには、主人の家族は白人でしたから、私は白人の場所に行ったんですが、一人で出掛けると困っちゃうんです。特にバスね。バスでは、白人は前、黒人は

後ろと決まっていた。私は白人じゃないからと後ろに座ろうとすると、あなたは黒人じゃないから、前へ行け、と言われるけれど、私は白人じゃないから行く場がない、それで真ん中に座っていたんです。

1年ほど経ったときに、主人の父がバッファローに転勤するというので、一緒について行くことにしてここに来ました。ここにも黒人はたくさんいました。黒人はカナダへ行きたくったんです、というのはカナダでは差別が無いから。今でも、南部から逃げてきた黒人をかくまった教会などが残っていますよ。終わり。

幸子さんが補足して、「昔は地下鉄道（Underground railway）という黒人を逃がす地下組織があったんです。助ける方も命がけですよ。大きなトランクに入れて黒人を運んだり、黒人の中には、あのナイアガラ川を泳いで渡ろうとした人もいたんですよ。」

私が昔英語の教員だったころ、キング牧師や黒人解放運動を扱った教材がたくさんあった。民主的な教員は、進んでそういう教材を、つまらない教材に差し替えて使っていた。私も、自分で、そういう教材を編集したりしていたので、何十年ぶりに、そのことを思いだした。バス・ボイコット運動のきっかけとなった女性ローザ・パークスさんの話や、キング牧師の I have a dream の冒頭の部分を暗記させたことなどを思い出した。

\*バスボイコット事件：1955年12月1日、アラバマ州モンゴメリー市営バスに乗車した[ローザ・パークス](#)は、白人優先席に座っていた。運転手が、後から乗車した白人のために席を空けるように指示したが、パークスはこれに従わなかった。パークスは、運転手の座席指定に従わなかったという理由で逮捕された。キング牧師らが、バスへの乗車のボイコットを呼びかけると、多くの市民がこれに応じた。結果として市のバス事業は財政破綻の危機に瀕することとなった。1956年11月13日、[連邦最高裁判所](#)は、地方裁判所の判決を支持する形で、モンゴメリーの人種隔離政策に対して[違憲判決](#)を下した。そして、運動は1956年12月20日に公式に終了した。

カナダのナイアガラ・フォールズ市でポットラックパーティーをした時、近くの公園に「黒人部隊」の記念碑が立っているのを見た。1912-13年にアメリカとカナダが、この周辺の領有をめぐる戦争をしたというのだ。オンタリオ湖の向こう側には、アメリカ側の要塞があり、当時は、湖を挟んで大砲を撃ち合っていたという。その記念碑によると、その戦争でアメリカが勝つと、折角カナダで自由の身になったのに、また奴隷にされてしまうと、黒人たちが自発的に部隊を編成して戦ったというのだ。この伝統は第一次世界大戦まで続いたという。話が横道にそれるが、ナイアガラの滝のそばに、戦死者の記念碑があり、それは、第一次世界大戦の戦死者を悼むために建てられたが、その横に第二次世界大戦の戦死者の墓碑銘が2つ、付け加えられていた。

ヨーロッパでは、第一次世界大戦の戦死者の数が圧倒的に多いが、ここでは第二次世界大戦の戦死者の数の方が多かった。

さて、てるよさんの話を聞いていたピーターがびっくりしたように言った。「オクラホマは Deep South ではないでしょう、そこでもこんな差別が行われていたなんて信じられない。Segregation というんですよね。」そうだ、その単語だ。30 年間頭の中に眠っていた単語がよみがえってきた。分離、隔離という意味だ。Deep South の州は、一般的にはルイジアナ州、ミシシッピ州、アラバマ州、ジョージア州、サウスカロライナ州を指す。ウィキペディアによると、「オクラホマは南部に含まれたり含まれなかったりする。」と書いてある。

ついでにもう一つ横道にそれると、てるよさんが水、というとき「ワラ」と言った。日本では、ウォーターというがアメリカではワラだ。インドへ行くと、ワルテルである。ワラは、ジョン万次郎の英単語帳にも、「水 ワラ」と出ている。美和子さんが言っていたが、「アメリカに来たときに、日本英語を、夫のお母さんが徹底的に鍛えなおしてくれて、本当に感謝している。もし義母がいなかったら、夫は、私の英語を直してはくれなかったろうから」と。幸子さんは、エスペラントで知り合った夫とカナダに渡ってきたが、英語があまりできなかったので、習得にずいぶん苦勞したようだ。ハンガリーの世界エスペラント大会で知り合ったユーゴスラビアの少女スポメンカは、その後エスペラント作家になったが「私は英語の習得に時間を取られてエスペラントで後れを取ってしまった」と残念そう。

## 恩送りの話

さてその幸子さんは、この時の話は余り身の上話とは関係なかったので、オンタリオ湖のほとりで聞いた話を、「唐丹基金」のニュースに書いた原稿から転載する。



イシュトク幸子さんの名前はずっと前から知っていました。私は、「世界エスペラント読書大相撲」というのを主催していて、幸子さんはもうかなり前からの参加者だったからです。この「大相撲」は、日本の大相撲に合わせて世界中でエスペラントの本を読もう、というのが趣旨です。その相撲の場所に、どの本を毎日何ページ以

上読むかを申告し、それがその日に読めれば白星、読めなければ黒星、となります。つまり、他の人と闘うわけではなく、自分の怠け心と闘うわけです。今年5月の「大相撲」は、第46回目に当たりました。現在は第47回の大相撲に向かって参加者の登録を行っています。5月には、世界31か国から360人が参加して、それぞれが選んだ本を読み進めました。今年韓国で世界エスペラント大会が開かれることもあり、このところ韓国勢が100人以上参加、日本は長らく1位でしたが、今は80人ほどで2位に甘んじています。この大相撲に、幸子さんは、多分もう5年以上参加をしているのではないのでしょうか。カナダからは、残念ながらほとんどの場所で、幸子さんがただ一人の参加者で、その意味ではカナダ代表のようなものです。

今回の旅行の前に、何回か幸子さんと高館さんが交わしたメールを横から覗き込んでいましたが、なかなか厳しいメールで、私たちは歓迎されているのかなと、心配になることもありました。しかし、ブログの中の若い頃の幸子さんを見るととってもかわいくて、本当はどんな人かなと、早く会いたい気持ちでした。

カナダで会ってみると、本当に素敵なお方でした。お年を召しておられ、杖を突いて歩いていましたが、口は達者で、なるほど、アメリカ、カナダに渡った女性は、こんなふうにはっきりものを言いながら過ごしているのか、それがあのメールにも反映しているのだなど、納得しました。私たちを迎えてくれた女性たちは皆、日本人観光客のガイドをしていた仲間なので、何を言っても分かり合える関係なのでした。

幸子さんは、若いときにエスペラントだけをもって世界に飛び出し、最初はスイスですごし、そのうち夫になる人と出会いやがてカナダに移住したとのことでした。今はその最愛の旦那さんに先立たれ、一人でお暮らしのようで、エスペラントが、大きな楽しみの一つのようです。オンタリオ湖のほとりで、スイス時代のお話を聞きましたが、エスペラントの仲間がいろいろ助けてくれ、職業訓練も出来たとのこと。また、そうしてもらえたことの基礎には、その人たちが知り合った日本人が皆まじめで、「日本人は信用できる。あなたも日本人だから信用できる」という、先人たちが築いてきた「日本人への信用」があったというのです。こうして受けた恩をどうお返ししたら良いか、と尋ねると、「あなたが他の人を助ければ、それが私たちへの恩返しですよ」と言ってくれたそうです。そして付け加えて「最近知ったのですけれど、そういうのを『恩送り』というのね」というのです。私は感激しました。私たちも、「唐丹希望基金は善循環運動、恩送り運動だ」と常々言ってきたからです。カナダで、幸子さんの口から「恩送り」の言葉が出てくるとは、夢にも思いませんでした。そんなこともあり、幸子さんへの思いは一層深くなりました。

もう日本へは行かない、とも言っていましたので、私たちが行くか、エスペランチストなら大相撲の中で交流するしかありませんが、多分もう一回はお会いする機会があるのではないかと、楽しみにしています。幸子さんと会えて「恩送り」の話を聞けただけでも、今回のアメリカ・カナダ鎮魂の旅は意義があったと思っています。

## 婚期を逸してアメリカへ

節子さんは、今回の旅行を仕切ってくれた人で、私と同年だが若くてきれいだ。「1964年、夫になる人が旅行者として京都に来て、私が案内してまわりました。私は、アメリカで勉強したい夢、宣教師になりたいという希望もありました。その後いろいろあるのですけれど、2年ほど文通して、その後求婚されて、私はもう婚期を過ぎているし、日本人はもらってくれないだろうと思っていたこともあってOKしました。またナイアガラの滝を死ぬまでに見たいと思っていたのです。バッファローは、ナイアガラの滝から車で40分くらいだと聞いて、それなら良いかと決めました。初めての海外旅行でしたが、7-8時間飛行機に乗っても陸続きなんですね、アメリカは本当に大きいなと実感しました。バッファローで住んだところは、文化的に濃厚なところで、ポーランド人、ドイツ人が多く住んでいて、庭などをきれいにしているんですね。

私は小柄で、その頃ミニスカートが流行っていたんですね。私がそんな姿でいたので、近所の人は、『あ、日本から来た交換学生だ』とっていました。そのうち子どもが生まれ、上の子が5歳、下の子が3歳の時ですかね、JAL Packが出来ました。夫がエアラインで働いていました。これから日本人がたくさん来るという話になって『うちの妻も日本人だ。使ってくれないか』ということで、ガイドの道に入りました。」

節子さんの話を聞くと、節子さんと私は、同じ京都の空気を吸っていたことになる。私は、1960年から65年まで京都で学生生活を送っていた。日本人が海外旅行に行くようになったのは1970年ごろで、その波に乗ったのが、この日に来ていた日本人女性ガイドたちである。話を聞くと、本当に懐かしい。婚期が24歳くらいだった時の話で、その当時の女性は、24を過ぎると「もうだめだ」と思っていたというのだ。今は婚期という言葉さえ死語で、結婚できない、しない女性（男性も）うじゃうじゃいることを考えると、まさに隔世の感がある。

## 好きなことをやりたい

志岐翠<sup>しきみどり</sup>さんの話。「私は5人きょうだいの真ん中で、親もあんまり関心を持ってくれない。親は教員で、何かつまらない職業だと思ったので、自分の好きなことをや

りたい、外国を見たいと思っていました。1967年かな、カナダ政府が移民募集を出していて、応募して採用されました。でも、空港で、「destination（目的地）は？」と聞かれても何を聞かれているのかさっぱりわからない状況でした。その後日本は経済発展して、日本人が世界に飛び出す時代が来ました。そんな中で仕事をもらって良い思いをしました。私は、英語を新橋の夜間の英語学校に通ったのですが、今でも苦勞しています。」

幸子さん「私は英語が嫌いで勉強しなかったのですが、カナダに来て英語を勉強しなければならなくなって、図書館で子どもの本を借りて勉強しました。」

翠さん「もう仕事も終わってしまいましたが、前向きに、頭を暇にしないようにして毎日を楽しんでいます。」

幸子さん「ガイドが必要で、日本語が話せる人は猫も杓子も駆り出されました。おかげで、日本語を忘れないで済みました。嫌なことがあってやめようかなと思うこともありましたが、そのたびに夫が『おかげで日本語を喋れるのだから』と言ってくれて、今でも日本語が喋れます。夫に『今やめたら自分を恨むよ』と言われて続けました。」

ガイドをやっていたときに、「絶対に英語を使うな」と言われたことがあって、と皆が話しだしました。

「バスの停留所と言ったら、バス停でしょ、カラーテレビのことを天然色テレビと言ったらカラーテレビでしょ、と笑われたり、バスの背が倒れますから、と言ったら、リクライニングでしょ、とおばあさんに言われたりしましたね。」

## アフリカ支援をライフワークに

美和子さんは、現職のガイドで、週に1-2回働いている。夫のピーターは、アメリカ



海軍第7艦隊の旗艦オクラホマに乗っていたが、友人のデートについて行って西友デパートで働いていた美和子さんに一目ぼれ、結婚した。美和子さんは鹿児島出身というが、その当時、鹿児島から東京に就職するのは、かなりの勇気がいったことだろう。(写

真は、美和子さんとピーター)

「私は20歳で知り合って、こっちに来ました。夫は海軍にいましたが、勤務が終わってから、奨学金が出るので、まだ学生でした。お金が無いので、60歳過ぎの叔母の家に住んでいました。その叔母が、私の日本英語を徹底して直してくれたので、自慢のようになりますが『あなたの英語はきれいだ』と言われることがあります。主人は公務員で、4時45分には仕事を終わって帰ってきて、3人の子どもの面倒を良く見てくれました。私は趣味が多くて、洋裁、和裁、ステンドグラス、あとゴミの日に捨ててあるソファを拾ってきて、全部張り替えることもやりましたね。今は引っ張る力がなくなったのでできませんが。最近太鼓のグループに入りました。日本の太鼓を作りたかったのですが、重いんですね。これは重すぎるのでだめだなと、本で調べて、インディアンの太鼓の作り方を知りました。この方法だったらやれる。日本の太鼓は鉦が重いんですよ。皮を注文して、どんな太鼓を作ろうかと思案中です。あ、蘭の同好会にも入っています。毎週水曜日に蘭の展示をしに行っています。孫がいないので、子どものためになることはないかしらと思っていたときに、アフリカの貧しい子どものために、寄付をして、ケニヤですが、学校建設、巡回医療の基金集めに参加しています。500年くらいヨーロッパがアフリカから資源を搾取してきた、それでアフリカがあんなに遅れてしまったのかと知って、アフリカ支援をライフワークにしたいと思っています。」

皆さんの話を聞いていて、すごいな、と思った。私は、海外旅行には行きたいとは思ったろうが、「死ぬまでにナイアガラの滝を見たい」とか「外国に住みたい」などと思ったことは一度もない。60年代、70年代は、女性の活動の場は狭く「永久就職」(結婚)みたいなことが夢だった時代だ。その中で、たまたまアメリカ人やカナダ人に出会ったからといって、見も知らぬ、知り合いもない国へ出かけて行くとは、本当にすごいことだと思う。この日、皆さんの話を聞いて、本当に感動した。そんな中で、人生を切り開いて行ったこの女性たちに、心からの拍手を送りたい。

この最後の夜は素晴らしかった。最初の晩にこんな交流があれば、もっと早くから打ち解けて、また別の展開もあったように思う。しかし、この夜から、これからに向けて、新しい展開があることだろう。

最後にもう一つ、バッファローでの「鎮魂の歌」のコンサートのあと、90歳を超えた老人が話しかけてきた。彼は、ポケットから明治時代の銀貨を採り出し、「これは僕

の宝物だ」と言った。彼は戦後すぐ日本に進駐し名古屋に行った。そこで、日本の青年と出会い、この銀貨をもらったという。ひと月前だったらお互いに殺し合っていたはずの日本人と、こんなふうに出会えて、お互いに人間なのだと感じた瞬間だった、という。この老人が、わざわざ私に近寄り、この話をしてくれたことも忘れられない。これが人間の本来の姿なのだが、無意味な戦争がそれを隔ててきた。この老人は、「和解」を、改めて私に訴えたのであろう。このことも、アメリカ、カナダ訪問の感動の一瞬だった。

\*イシュトク幸子さんは10月19日、亡くなりました。知らせを聞いてびっくりしました。エスペラント大相撲にはかかさず参加してくれました。彼女が最後に読んでいた本は、妹の板橋満子さんが翻訳したいぬいとみこの *La nanoj en domo kun granda zelkovo* でした。ご冥福を祈ります。



